

## 実践報告

# 看護教員による救急看護模擬実演の成果

寺島久美, 山岡深雪, 黒木瞳, 井上理恵子, 沼口文枝,  
谷口敦子, 溝口友美, 宮田真央, 大脇裕子, 古川佳寿美

### 【要旨】

本研究の目的は、看護基礎教育課程で実施した看護教員による救急看護の模擬実演の成果を明らかにすることである。

研究対象は、成人看護方法の救急看護模擬実演に参加した3年次生のうち研究協力に同意した83名の救急看護の模擬実演見学後の感想カードである。感想カードには、①興味深さ、②救急場面での看護のポイントと根拠の理解、③救急医療における看護の役割理解、④救急看護における基本技術の意義の明確化の4設問を設け、3段階評価とし、加えて自由記述欄を設けた。分析方法は、感想カードの評価をスコア化して単純集計を行い、自由記述内容については質的記述的内容分析を行った。

全設問項目の平均は、概ね高得点であった。自由記述では、学生の学びとして136のカードから、18サブカテゴリ、6カテゴリを抽出した。カテゴリ間の関連性を検討した結果、学生は、看護教員による救急看護の模擬実演を通して、【救急場面の緊迫した雰囲気を実感的に実感】し、【生命が脅かされた患者の状況を観念的に追体験して看護の意義に気づ】き、【生命を守るために協働するチーム医療の重要性を実感してチーム内での看護者の役割認識を深め】、【既修の看護基本技術の意義を改めて実感して学修意欲を高め】ていた。そして、【患者の生命を救いその人生に関わる看護者としての責任の重さを感じる】とともに、【ありがたい看護師像を描いて自己の課題を見出し学修意欲を高め】ていたことが明らかになった。

救急場面での看護のポイントとその根拠の理解がより深まるように、教育方法をさらに工夫し改善していくことが課題であった。

**【キーワード】** 看護基礎教育, 救急看護, 救命処置, 模擬実演

### I はじめに

救急看護に関わる基礎教育では、生命や身体状況の危機に直面している患者の状況から迅速に全人的な判断を行ない、医療チームで看護の役割を発揮するための基本的な知識・技術を修得するとともに、

生命の危機と対峙している患者・家族について理解を深め、支えていくチーム医療の一端をできるだけリアリティをもって実感できること、そして看護職者としての使命感を高めていくことが重要であると考えている。しかし、学内での講義のみの教育では

---

Kumi Terashima, Miyuki Yamaoka, Yumi Mizoguchi, Mao Miyata, Yuko Owaki,  
Kazumi Furukawa：宮崎県立看護大学  
Hitomi Kurogi：宮崎県立延岡病院  
Rieko Inoue：元宮崎県立看護大学  
Fumie Numaguchi：宮崎県立日南病院  
Atsuko Taniguchi：宮崎県立こども療育センター

限界があり、また、学生時代に救急看護を経験する機会が極めて限られている。

文部科学省（2011）の「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告」<sup>1)</sup>においても医療現場の変化に伴って臨地実習における実施内容が制限される傾向が指摘され、関連して看護実践能力強化の課題が示されている。また、厚生労働省（2011）の「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」<sup>2)</sup>においては、医療の高度化により侵襲を伴う行為の実施が求められる一方、学生が侵襲を伴う行為を経験することが難しくなっている臨床現場の現状から、臨地実習で経験できない内容や侵襲を伴う行為の修得について、シミュレーション等による学内演習で補完する工夫が推奨されている。

救急看護基礎教育に関わる過去の報告では、シミュレータを用いた心肺蘇生法演習の報告<sup>3)~5)</sup>などがあるが、学士課程教育に携わる教員による救急看護模擬実演の報告は見つからず、特に看護基礎教育における二次救命処置等に関しては、教育・学修ニーズの把握や実践報告の蓄積が望まれることが指摘されている<sup>6)</sup>。

私たちは、2005年より「生命の危機状態にある成人と家族への看護」の教育として、生命の危機状態にある患者の特徴と看護の役割について学修したのちに、急変時に必要とされる心肺蘇生法等の基本技術演習を行い、それら看護技術の統合として、看護教員による救急看護模擬実演を実施し、さらなる基本技術の修得につなげる演習を行っている。この授業は、年々改善を加え、最近ではすべての学修段階を通して1事例を用いて実施し、各学修段階で学生が行為のみに着目して学修するのではなく、事例と重ねて常に患者の立場から行為の目的と意味を考えながら演習できるようにとの意図をもって展開している。また、重篤な患者を目の前にして、各々の基本技術と知識とを統合して臨床判断を行い、救命していくチーム医療を学ぶ機会と考えている。その上で、救急看護模擬実演は、学内で学生が患者を全人的に捉えながら、救急看護の一端に触れ、そこから救急

看護に必要な看護基本技術・知識の意義を実感して学修のモチベーションを高め、看護職者をめざす者としての自覚や使命感が高まっていくことをねらいとしている。

毎年、救急看護模擬実演後に学生に自由記述の感想を記述させ、その内容を吟味して授業評価と改善に役立てている。今回、学修成果と課題をより明らかにするために、自由記述欄を増やし、加えて救急看護模擬実演の目標につなげた設問を設定した感想カードを作成し、学生に感想を求めた。この感想カードの記述をもとに救急看護模擬実演の成果を明らかにしたので報告する。

## II 目的

看護基礎教育課程で実施した看護教員による救急看護模擬実演の成果を明らかにする。

## III 対象と方法

### 1 救急看護模擬実演を含む救急看護の授業概要

救急看護の授業概要を表1に示す。

#### 1) 学生の準備状況

本授業は、3年次前期の成人看護方法（必修、2単位、60時間）で実施した。救急看護に関わる授業時間は6コマ（2コマ×3回）で、学修課題は「救急看護における看護の役割を理解し、救急看護に必要な看護基本技術を修得する。」である。

最初の4コマ（2コマ×2回）で、「生命の危機状態にある対象の特徴と看護の役割」について事例を用いて学修したのちに、25名程度ずつの4グループに分かれて、事例情報とつなげながら「心肺蘇生法（一次救命処置BLS；basic life support）」、「静脈ライン確保の介助・輸液ポンプの管理」、「膀胱留置カテーテルの挿入・管理」、「気管吸引」等の講義と看護基本技術の演習を行った。各技術演習には到達目標を明記し、学生自身が到達度を自己評価できるようにした。

#### 2) 救急看護模擬実演の目的

学生時代に遭遇しがたい救急看護の模擬実演を

表1 救急看護模擬実演を含む救急看護の授業概要

<p><b>学修課題：</b>救急医療における看護の役割を理解し、救急看護に必要な看護基本技術を修得する。</p> <p><b>目標：</b>1) 救急医療場面（一次救命処置BLS/二次救命処置ALS）の実際（救急看護の模擬実演）を知り、救急看護のポイントを理解し、看護者の果たす役割について考え、救急看護に必要な基本技術の修得レベルを高める。</p> <p>2) 医療用機器・器具等の特性を理解して正しく活用することを学び、患者の安全を守る医療安全の認識を高める。</p> <p><b>方法：</b>6コマ（2コマ×3回）で、下記の基礎知識・技術を修得する。</p> <p>1) 救急患者への看護基本技術                  静脈ライン確保の介助・輸液ポンプの管理、膀胱留置カテーテルの挿入・管理、                  気管吸引、心肺蘇生法（一次救命処置BLS）、さまざまな酸素療法、                  ベッドサイドモニタの観察・管理</p> <p>2) 救急看護の模擬実演の見学 他</p> <p><b>展開：</b>6コマのうちの4コマ（2コマ×2回）で、「生命の危機状態にある対象の特徴と看護の役割」について事例に基づいて学修したのち、「心肺蘇生法（一次救命処置BLS）」、「静脈ライン確保の介助・輸液ポンプの管理」、「膀胱留置カテーテルの挿入・管理」、「気管吸引」の技術演習を行なう。その後の2コマ（1回）で、50名程度ずつ2グループにわけて救急看護模擬実演を見学した後、さまざまな酸素療法とベッドサイドモニタの観察・管理について学修し、再度技術演習を行なう。</p> <p><b>【救急看護の模擬実演】</b>                  目的：学生時代に遭遇しがたい救急看護の模擬実演を見学することで、医療チームメンバーとして協働しながら対象の生命を守り、家族を支援する救急看護の特徴と役割の理解を深める。救急看護に必要な看護基本技術の意義の理解を深め、技術修得のモチベーションをあげるとともに看護職者をめざす者としての自覚を高める。</p> <p>方法：1ベッドを中心に学生（50名程度）が見学できる場を設定。救急看護模擬実演の目的・方法の説明後、30分程度の救急看護模擬実演を行なう。学生は救急看護模擬実演を見学し、終了後に質疑応答を行ない、学びを整理する。</p> <p><b>&lt;事例及び場面の概要&gt;</b>60歳 女性 心不全 既往歴：高血圧症                  夕方頃から息苦しくなり動けなくなった。夫が救急隊に連絡し、夫に付き添われて緊急搬送。搬送中にSpO<sub>2</sub>85%と低下し、酸素マスク5ℓ/分で酸素吸入開始、SpO<sub>2</sub>95%に改善。医師より前述の患者情報の連絡があり、緊急入院となる。医師と協働して、酸素マスク・モニタ装着、輸液ラインの確保、膀胱留置カテーテルを挿入し、医師が退室。看護師が呼吸・循環状態を観察しながら整えているところで突如心室細動となる。看護師による一次救命処置BLSを行い、医師来室後、二次救命処置(ALS：心肺蘇生、気管挿管、人工換気、除細動、薬液静注)を行なって救命し、集中治療室へ転棟。（医師役1名、看護師役3名で構成）</p>
---

見学することで、医療チームメンバーとして協働しながら患者の生命を守り、家族を支援する救急看護の特徴と役割の理解を深める。救急看護に必要な看護基本技術の意義の理解を深め、技術修得のモチベーションをあげるとともに看護職者をめざす者としての自覚を高める。

3)救急看護模擬実演の方法

1ベッドを中心に学生（50名程度）が見学できるように周囲を囲む形で場を設定。教員が救急看護模擬実演の目的・方法を説明した後、4名の看護教員で30分程度の救急看護模擬実演を行なった。

4)事例及び救急場面の概要

60歳、女性、心不全。既往歴：高血圧症。夕方頃から息苦しくなり動けなくなった。夫が救急隊に連絡し、夫に付添われて緊急搬送。搬送中にSpO<sub>2</sub>85%に低下し、酸素マスク5ℓ/分で酸素吸入開始、SpO<sub>2</sub>95%に改善。事前に医師より前述の患者情報の連絡を受け、緊急入院を受け入れる場面。

看護師役の教員（以下、看護師）が、医師役の教員（以下、医師）から連絡を受け、病室の準備を行う。患者が医師、看護師とともにストレッチ

ヤーで入室，看護師が医師と協働して患者・家族に声をかけながら酸素マスク・モニタ装着，輸液ラインを確保し輸液開始，膀胱留置カテーテルを挿入する。医師が退室したのちに看護師（1名）が観察をしながら呼吸を整えているところで突然心室細動となりモニタのアラームが響く。看護師は直ちに観察を行いながらナースコールで緊急招集をかけBLSを開始，看護師2名が救急カートと除細動器を持参する。看護師3名でBLSを行っているところに医師（1名）が到着，BLSを続行しながら医師に状況報告，医師の指示に応じて二次救命処置ALS；advanced life support(心肺蘇生，気管挿管，人工換気，除細動，薬液静注)を行なって救命し，集中治療室へ転棟する。

患者役はモデル人形を用いて，患者の声を学生から見えないところで教員が担当した。心肺蘇生のシナリオは実施時点で最新のJRC（日本版）ガイドライン<sup>7)</sup>に沿って作成した。

#### 5)救急看護模擬実演終了後の質疑応答と技術演習

救急看護模擬実演終了後に学生と教員で質疑応答を行ない，看護のポイントに沿って学びを整理し，最後に医師・看護師にインタビューを行い，それぞれが何を見てどう判断し行動していたのかについて確認し共有した。その後，さまざまな酸素療法とベッドサイドモニタの観察・管理について学修し，各自でさらに深めたい技術演習を行った。

## 2 研究対象

成人看護方法の救急看護模擬実演に参加した3年次生で研究協力に同意した83名の救急看護模擬実演見学後の感想カードの記述。

## 3 データ収集方法

救急看護模擬実演終了時に参加した学生全員に感想カードを配布し，演習終了後1週間以内に提出とした。感想カードの記述内容は，①興味深かったか，②救急場面での看護のポイントとその根拠は理解できたか，③救急医療における看護の役割の理解が深

まったか，④救急看護における看護基本技術の意義がより明確になったかの4設問に対し，〈とても・ふつう・少し〉の3段階評価とし，自由記述欄を設けた。

## 4 分析方法

1)感想カードの評価を「とても（3ポイント），ふつう（2ポイント），少し（1ポイント）」でスコア化し，その結果を単純集計し，平均得点を算出した。

### 2)自由記述の分析

下記の要領で質的記述的に内容分析を行った。分析は共同研究者で行い，分析の妥当性を確保した。

(1)どのような学びをしているかという観点から記述を繰り返し読み，全体を把握した。

(2)まとまりをもった意味内容ごとに記述を抜き出しカードに整理した。

(3)全カードについて学びの意味内容の共通性に着目してグループ化を行い，グループに共通する意味を抽出してネーミングし，サブカテゴリ，カテゴリ化を行った。

(4)カテゴリ間の関連性を検討し，教員による救急看護模擬実演の学生の学びの全容を明らかにした。

## 5 倫理的配慮

当該授業科目の成績確定後，該当する学生全員に対し，研究目的，方法，研究参加への自由意思，研究への承諾が成績とは無関係であること及び匿名性を含めた倫理的配慮について，研究協力依頼文書を用いて口頭で説明し，文書にて承諾を得た。研究過程で個人が特定できないように記号化し匿名性を確保した。

## IV 結果

### 1 感想カードの評価スコア

各々の設問項目の平均得点は，「興味深かったか」2.98ポイント，「救急場面での看護のポイントとその根拠は理解できたか」2.30ポイント，「救急医療における看護の役割の理解が深まったか」2.89ポイ

ント、「救急看護における看護基本技術の意義がより明確になったか」2.92ポイントであり、全項目の平均は2.77ポイントであった。設問項目ごとの集計結果を図1に示す。

## 2 自由記述

### 1) 学びの意味内容の抽出

自由記述について、学生の学びに注目して精読し、まとまりをもった意味内容ごとに抜き出しカード化した結果、136の意味内容を持つカードに分けられ、18サブカテゴリ、6カテゴリが形成された(表2)。カテゴリごとに抽出過程の一部を以下に示す。【 】内はカテゴリ、「 」内はカードの記述を示す。

### (1) 【救急現場の緊迫した雰囲気を実感的に実感する】

は、27枚のカードを含む4サブカテゴリで形成された。このカテゴリに含まれたカードの記述は、「模擬実演だったが、まるで本当の現場のような緊張感があり、これが看護の現場なのだと感じた。」「目の前の患者さんを助けようと必死なのに冷静であるように見えてすごい、自分がもしこの場面に行ったら同じようにできないだろうと思った。看護師という立場から、医師に確認をしている様子も見る事ができた。」「みんなの患者さんを救いたいという気持ちがすごく伝わってきた。技術も大切だけどその気持ちが一番大切かなと考えた。」などであった。

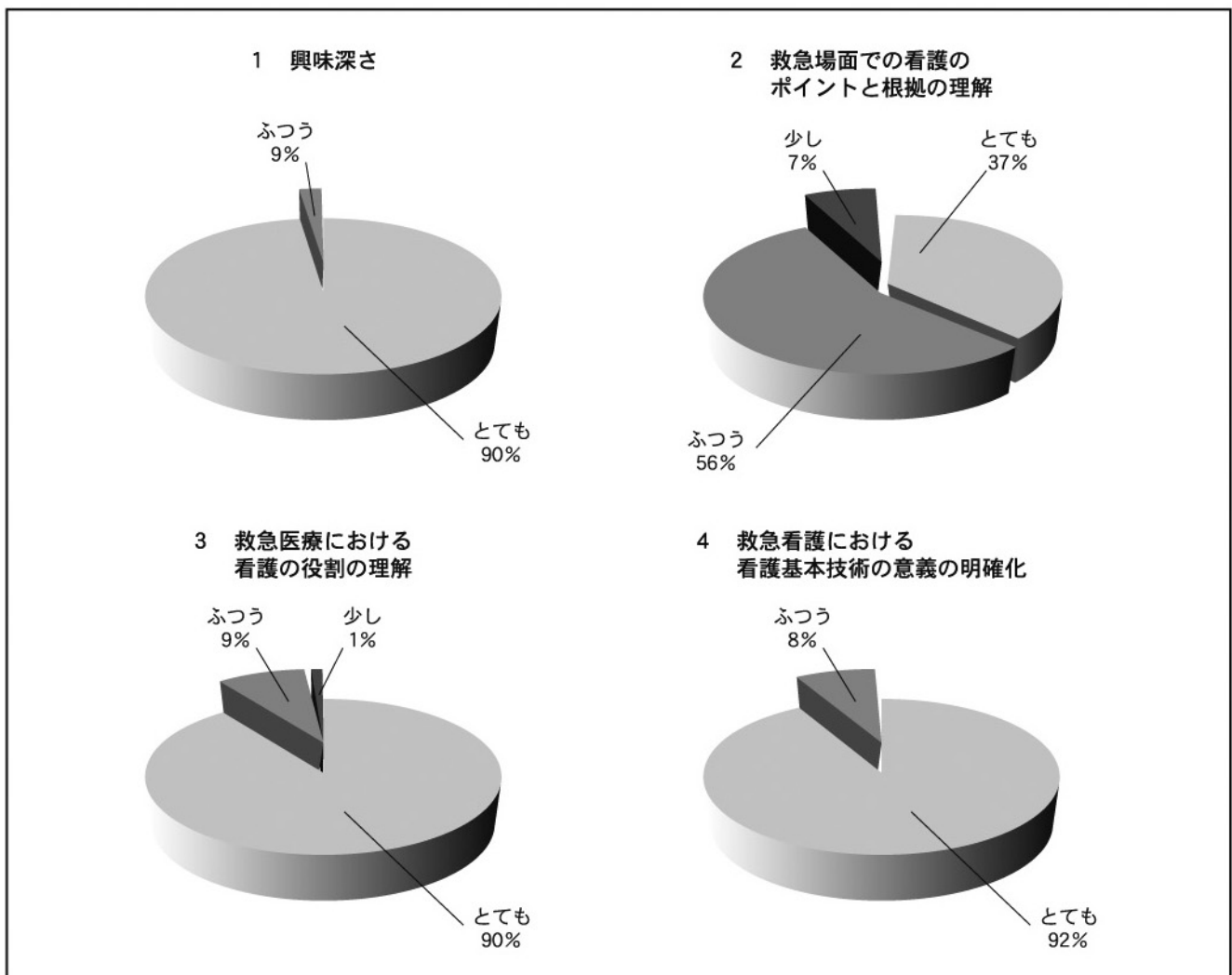


図1 救急看護模擬実演における感想カード評価スコアの集計 (n=83)

表2 看護教員による救急看護模擬実演による学生の学び

カテゴリ	サブカテゴリ	カード数	カードの1例
救急現場の緊迫した雰囲気を実感的に実感する	実際の救急の現場をイメージできたと感じる	6	模擬実演だったが、まるで本当の現場のような緊張感があり、これが看護の現場なのだと感じた。
	救急場面に遭遇した自分を想像し不安を抱く	7	目の前の患者さんを助けようと必死なのに、冷静であるように見えてすごい、自分がもしこの場にいたら同じようにできないだろうと思った。看護師という立場から、医師に確認をしている様子も見ることができた。
	救急場面に遭遇した自分を想像し、看護師としての自己の課題を見出す	11	患者が急変したとき、手すりなどのじゃまになるものをすぐに取り除き、患者の呼吸、脈拍の確認を手早く行い、胸骨圧迫を行ったところがすごいと思った。患者の急変だからすごく焦りそうだけど、しっかり周りを見て、必要なことを考えてパッと動ける頭にもなれるように、今の学修をしっかりしていこうと思った。
	模擬実演をみて医療チームの患者を救いたいという思いを感じ取る	3	みんなの患者さんを救いたいという気持ちがすごく伝わってきた。技術も大切だけど、その気持ちが一番大切かなと考えた。
生命が脅かされた患者の状況を観念的に追体験して看護の意義に気づく	生命が脅かされている患者の位置に入りながら、その苦痛を感じとり、ケアによって緩和されていくプロセスを疑似体験する	1	患者さんの“苦しい”という言葉や全身状態から発せられるメッセージを見ているだけでも一緒に息苦しさを感じ、ナースやドクターによって危機が回避されていくと息苦しさもなくなってきた。技術はもちろんナースが“そばにいますよ”“～しますよ”など声掛けを続けているので、苦痛から意識が遠のきつつある患者には安心できるだろうと思った。
	生命の脅かしを受ける患者にとっての看護師の存在や関わりの意味に気づく	3	最初は息苦しそうだった患者さんがベッドをギャッジアップされたり、深呼吸を促されたりすることで、呼吸が楽になっていったのを見て、その人を安楽で安全な状態にするのには看護の役割が大きいのだと思った。呼吸法だけではなく、“そばにいる”ということ伝えるなど、精神的なことも呼吸に大きくつながっているのだと改めて分かった。
生命を守るために協働するチーム医療の重要性を実感してチーム内での看護師の役割認識を深める	全体の動きをみて自分の役割を見出して他者と協力して患者の命を守ることに気づく	25	緊張感が伝わってきた。みんなの想いが一つになっていて、ドクターとリーダーナースを中心に救急であっても、スムーズな働きに感動した。一人では救うことが難しいかもしれないが、チームになることで救えるということがわかった。脳に酸素が行くように最善を尽くす。救急カートは常に準備しておく。
	全体を把握する大切さに気づく	6	多くの機器を使い、指示を把握。操作前後での行動の確認など慌ただしい場ではあるが、患者の様子をしっかり観察し、声かけも行い、気配り、注意があらゆる方向に向いていると思った。
	全体をみて統括するリーダーナースの役割についてわかる	4	実演を見て、医師とナースの連携、役割分担がとても重要であると思った。またその場でナースが指示されて動くだけでなく、今この場ですべきことは何かをナースも考えて行動しなければと思った。また、リーダーナースが胸骨圧迫を行っているナースの様子まで気にかけていて、全体を広い視野で見る目も必要になると思った。
	その時々情報を医療者間で共有し生命を守るために協働することの大切さに気づく	7	医療者間で“酸素5Lです”“はい5L”など何度も確認し、共有することで間違いを防いでいると思った。スタッフ全員がその患者を助けたいという思いでそれぞれの役割を發揮し、また助け合って看護していることがわかった。救急医療では1分1秒を争うので医療者全員が流れを頭に入れておき、先の動きを読んで行動し、声をかけあいながらチーム医療を行うことが大切だと感じた。
	生命を守るためにも事前準備が必要であることに気づく	1	ナースとして患者の生命を救うことを最優先に動けるようにするためには、患者の様子を観察し、医療機器がいつでも使えるかの確認をする。
	患者や周りの状況を見ながら先を読んだ行動が重要と気づく	24	色々なことが一気におきて圧倒された。看護師の動きを見ていると次に何をやるのか、何が必要なのかということを考え、予測しながら、看護師と医師が4人もいるのに、混乱することなく各自がそれぞれ必要なことを行っていた。
	救急場面での家族への配慮やケアの大切さに気づく	9	患者の家族をフォローするのも大切なことで家族は突然のことで不安が大きいと思われるので、家族の精神的ケアが必要である。
	すべての行為に意味があると気づく	2	連携がすごかった。それぞれの行動すべてに意味があった。
	既修の看護基本技術の意義を改めて実感して学修意欲を高める	救急場面における既修の看護基本技術の意義を改めて実感し、技術を磨き、身に付ける必要性を感じる	11
患者の生命を救いその人生に関わる看護師としての責任の重さを感じる	看護師としての責任の重さを実感する	3	改めて自分が将来就く仕事が患者の命と隣合わせで自分の行動が患者の命を左右することになるということを感じた。
	患者の急変を目の当りにし、救命処置がその人の人生を左右すると実感	1	処置をして大丈夫になっても、すぐに命の危機が訪れるのだということ改めて実感した。その時にすぐに胸骨圧迫を行ったり、チームを作って素早く救急看護を行うことで、救命できたり、患者のそのあとの人生を大きく変えることができるんだと思った。
ありたい看護師像を描いて自己の課題を見出し学修意欲を高める	患者の命を救う看護師の動きに感動し、ありたい看護師像を描いて意欲を高める	12	心停止状態の患者が目前にいると思うと背中に寒気が走った。そのように命の危機にある人を目の前にしてでも、全体を見渡しながらかみして自分の役割をはたしている看護師のみならずはすごい!!!と思った。“患者を助けたい”という強い思いと、全体の流れ(医師が行っていくことも含めて)を把握しておくこと、混乱してしまいそうになる自分を冷静に保つ力があってこそできるのではないかと考えた。圧倒されたけど、自分もあんな風になれるようにしたいと思った。

(2) 【生命が脅かされた患者の状況を観念的に追経験

して看護の意義に気づく】は、4枚のカードを含む2サブカテゴリで形成された。このカテゴリに含まれたカードの記述は、「患者さんの“苦しい”という言葉や全身状態から発せられるメッセージを見ているだけでも一緒に息苦しさを感ずき、ナースやドクターによって危機が回避されていくと息苦しさもなくなってきた。技術はもちろん、ナースが“そばにいますよ”“～しますよ”などと声かけを続けているので、苦痛から意識が遠のきつつある患者には安心できるだろうと思った。」「最初は息苦しそうだっただ患者さんがベッドをギャッジアップされたり、深呼吸を促されたりすることで、呼吸が楽になっていったのを見て、その人を安楽で安全な状態にするのには看護の役割が大きいのだと思った。呼吸法だけではなく、“そばにいる”ということ伝えるなど、精神的なことも呼吸に大きくつながっているのだと改めてわかった。」などであった。

(3) 【生命を守るために協働するチーム医療の重要性を実感してチーム内での看護者の役割認識を深める】

は、78枚のカードを含む8サブカテゴリで形成された。このカテゴリに含まれたカードの記述は、「色々なことが一気に起きて圧倒された。看護師の動きを見ていると次に何をやるのか、何が必要なのかということを考え、予測しながら、看護師と医師が4人もいるのに、混乱することなく各自がそれぞれ必要なことを行っていた。」「多くの機器を使い、指示を把握。操作前後での行動の確認など慌しい場ではあるが、患者の様子をしっかりと観察し、声かけも行い、気配り、注意があらゆる方向に向いていると思った。」「連携がすごかった。それぞれの行動すべてに意味があった。」などであった。

(4) 【既修の看護基本技術の意義を改めて実感して学修意欲を高める】

は、11枚のカードを含む1サブカテゴリで形成された。このカテゴリに含まれたカードの記述は、「今までに自分たちが学んでき

た技術が、模擬実演の中に詰まっていた、患者の消耗にならないためにもこれまでの技術をもっと磨いて身につけていくことが大切なんだと実感できた。」「救急看護の実演に、今していること、今まで習ったことがすべてあいまってきていて、今しっかり基礎を正しく身につけないと患者の命を救えない！と改めて思った。」などであった。

(5) 【患者の生命を救いその人生に関わる看護者としての責任の重さを感じる】

は、4枚のカードを含む2サブカテゴリで形成された。このサブカテゴリに含まれたカードの記述は、「改めて自分が将来就く仕事が患者の命と隣り合わせで自分の行動が患者の命を左右することになるということを感じた。」「処置をして大丈夫になっても、すぐに命の危機が訪れるのだということ改めて実感した。その時にすぐに胸骨圧迫を行えたり、チームを作って素早く救急看護を行うことで救命できたり、患者のその後の人生を大きく変えることができるんだと思った。」などであった。

(6) 【ありがたい看護師像を描いて自己の課題を見出し学修意欲を高める】

は、12枚のカードを含む1サブカテゴリで形成された。このサブカテゴリに含まれたカードの記述は、「心肺停止状態の患者が目前にいると思うと背中に寒気が走った。そのように命の危機にある人を目の前にしてでも、全体を見渡しながらか読みして自分の役割を果たしていている看護師のみなさんはすごい!!!と思った。

“患者を助きたい”という強い思いと、全体の流れ（医師が行っていくことも含めて）を把握しておくこと、混乱してしまいそうになる自分を冷静に保つ力があることではないかと考えた。圧倒されたけど、自分もあんな風になれるようになりたいと思った。」「こんな生死の狭間で一生懸命生きようと頑張っている患者さん、それを救おうと必死になっている医師やナースの姿を見て思わず涙がこぼれそうになりました。モデル人形ではあったけど、生きようとする力を不思議と強く感じました。果たすべき役割は医師とナ

ースは違うけど、気持ち、目的、目指すところは同じ（救いたい!!!）なのだ」と強く感じました。その中でナースとしての役割が果たせるように頑張ろう！と思いました。」などであった。

## 2)カテゴリ間の関連性の検討から抽出された学びの全容

全カテゴリ間の関連を検討し、看護教員による救急看護模擬実演における学びの内容として以下の内容が明らかになった。

学生は、【救急場面の緊迫した雰囲気を実感的に実感】し、【生命が脅かされた患者の状況を観念的に追経験して看護の意義に気づき】、【生命を守るために協働するチーム医療の重要性を実感してチーム内での看護者の役割認識を深め】、【既修の看護基本技術の意義を改めて実感して学修意欲を高め】ていた。そして、【患者の生命を救いその人生に関わる看護者としての責任の重さを感じる】とともに、【ありたい看護師像を描いて自己の課題を見出し】ていた。

## V 考察

### 1 看護教員による救急看護模擬実演における学生の学び

看護教員による救急看護模擬実演は、前述したように、学生時代に遭遇しがたい救急看護の模擬実演を見学することで、医療チームメンバーとして協働しながら患者の生命を守り、家族を支援する救急看護の特徴と役割の理解を深める。そして救急看護に必要な看護基本技術・知識の意義の理解を深め、知識・技術修得のモチベーションをあげるとともに看護職者をめざす者としての自覚を高めることを目的として実施している。

毎年、教育評価を行い、改善を重ねながら継続実施しているが、毎回、実演時の学生の集中度は高く、患者が蘇生された瞬間、歓声やどよめきが起こったり、涙ぐんだり、足が震えたといった反応が見られ、学生たちは心揺さぶられながら学修している様子があ

かがえる。

今回、学生の感想カードの記述の分析を通して、学生にとって救急看護の模擬実演は、救急看護の緊迫した雰囲気を現実的に実感する経験となり、生命が脅かされた患者や家族の立場にたち、目の前で起きる状況を感じ取ったり、看護者の思いや行動を感じ取ったりしながら、看護の役割と意義に気づくことができていることがわかった。また、それらを通して、患者の生命を守るために看護者としての役割や他職種と協働する重要性を感じ、その役割を果たすために必要な基本技術・知識の意義を実感して学修意欲を高めていた。さらには、患者の生命に関わる看護者としての責任を感じて、ありたい看護師像を描くことで自己の課題を見出し、看護職者をめざす者としての自覚や使命感が向上していたことが明らかになり、教員がねらいとしている以上の成果をあげていることが評価できた。

救急看護の基礎教育に関して、救命処置教育は単なる技術修得にとどまらず、状況判断能力やチームワークの学修などの教育効果が期待でき、特にチーム医療を学ぶ上で救命処置教育の方法を検討することは意義がある<sup>6)</sup>とされている。このような中で、今回明らかになった看護教員による救急看護模擬実演は、刻々と変化する医療現場での救急看護とチーム医療について、学生が短時間の中で臨場感を持って医療スタッフの臨床判断と重ねて学ぶ機会になっており、救急看護基礎教育の一方法としての意義を見いだすことができたとと言える。

このような成果につながる条件として、教員の事前準備の重要性が挙げられる。救急看護の特徴として、わずかな情報から対象の全体像・対象特性を捉えてチーム医療・看護につなげていくことが求められる。そのような条件を満たす事例の教材化から、教材事例に教員自身が看護者として向き合いアセスメントをして看護の方向性を導き出す頭づくり、救急場で展開する看護技術をその事例にとっての質の高い看護技術に仕上げていく技づくり、担当者がそれぞれ看護師、医師役として患者に向き合い、モデル人



形があたかも実際の患者として見えてくるような場づくりをめざしたチーム医療の訓練、心不全で呼吸困難を呈している患者の声の担当等々、救急看護模擬実演の到達目標と教育のポイントを共有し、看護教員チームで一丸となって進めていく準備のプロセスが重要となる。このプロセスを経ることによって、学生の前で展開されるあらゆる行為が看護行為となり、それを見る学生が患者や家族の様子に心揺さぶられながら、医療者の行為一つ一つの意味を考え、全体としての意味を見出すことにつながってくるのだと思われる。また、救急看護に関わる看護基本技術の修得については、成人看護学領域以外の教員も毎年多数参加し、一貫した看護理論のもと、教育目的や到達目標、指導のポイントを共有しながら個別指導を行っており、このような領域を超えた細やかな指導を実現できる教育体制が、教育成果の基盤になっていると考えられる。

学生の感想カードは毎年生き生きした表現で記述されており、教員自身もそこから新たな気づきや学びがあり、看護基礎教育への喜びを感じている。ある学生は、「まるでスタッフ全員の動きを統括している脳がどこかにあって、そこからの指示に従って動いているかのように感じた。これがチームの力であり、この力が迅速な処置につながり、結果、人の命が助かるんだと思った。」と記述していた。このような見方ができる学生の力に感動するとともに、その力をさらに引き出す教育力を高めていく必要性を感じ、看護教育に携わる者として初心に立ち返り、看護者・看護教員としての使命感を高める機会となっている。

## 2 看護教員による救急看護模擬実演の学修効果を高めるための課題

上記のような成果をあげる一方で、①興味深さ、②救急場面での看護のポイントと根拠の理解、③救急医療における看護の役割理解、④基本技術の意義の明確化の4設問に対して、概ね2.9ポイントという高いスコアを得ることができたが、②救急場面での

看護のポイントと根拠の理解のみが2.3ポイントとやや低いスコアにとどまっていた。これは、救急場面での看護のポイントと根拠の確認が、救急看護模擬実演後の質疑応答時の口頭での説明で終わっていることに原因があると考えられた。翌年より、領域内ミーティングで検討を行い、救急場面での看護のポイントと根拠について記述した資料を作成し、救急看護模擬実演前に配布して終了時に質問や感想を受けながら資料を活用して頭の整理をするように改善をはかっている。その結果、この点に関する学生の評価は他と同様のレベルに到達することができている。

また、多くの学生は前述のような学びができていたが、学生によっては、「自分が救急場面に遭遇した時に行動できるか不安」という記述で終わっている者も若干認められた。このことから、救急看護はチーム医療であることを確認し、学修途上の現段階であっても、チームメンバーとして可能な対応について考えさせるとともに、救急看護模擬実演を想起して対応できた先輩の臨地実習での経験や卒後間もない時期での救急看護の実践例を伝えている。その成果もあり、同様の記述は減ってきている。

## VI 結論

学生の感想カードを分析した結果、教員による救急看護の模擬実演を通して学生は、救急場面を現実的に感じ取り、患者の位置に立ちながら看護の意義と役割、他職種との協働の重要性の理解を深め、生命を守る責任を自覚して学修意欲を高めていたことが明らかになった。さらに、学生個々への教育効果について探求し、より効果的な教育方法を検討することを続けていきたい。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2011) : 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/\\_icsFiles/fieldfile/2011/03/11/1302921\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/fieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf) (2016年9月15日アクセス)
- 2) 厚生労働省 (2011) : 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書.  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf> 2011 (2016年9月15日アクセス)
- 3) 貞永千佳生, 永井庸央, 今井多樹子, 他 (2014) : 看護基礎教育における一次救命処置演習に対するシナリオを活用したシミュレーション教育の学習効果, 県立広島大学保健福祉学部誌, 14(1),87-99.
- 4) 堀理江, 藪下八重, 廣坂恵, 他 (2012) : 看護基礎教育における高性能シミュレータを用いた心肺蘇生法演習の学びと課題, ヒューマンケア研究学会誌, 4(1), 1-8.
- 5) 太田名美, 山内栄子, 林優子 (2012) : 米国の看護基礎教育におけるシミュレーション教育の現状～Winona State University看護学部における急性期看護のシミュレーション教育～, 大阪医科大学看護研究雑誌, 第2巻,87-94.
- 6) 木下里美, 長田泉, 中村英子, 他 (2010) : 看護における救命処置教育に関する文献検討, 神奈川県立保健福祉大学誌, 7 (1) ,103-111.
- 7) 日本救急医療財団, 日本蘇生協議会 (2011) : JRC (日本版) ガイドライン2010 (確定版) 一次救命処置 (BLS). [http://www.qqzaidan.jp/pdf\\_5/guideline1\\_BLS\\_kakutei.pdf](http://www.qqzaidan.jp/pdf_5/guideline1_BLS_kakutei.pdf) (2016年9月15日アクセス)

## Actiity Report

### Effectiveness of Simulated Demonstration Teaching in Emergency Care by Nursing Teachers

Kumi Terashima, Miyuki Yamaoka, Hitomi Kurogi, Rieko Inoue, Fumie Numaguchi,  
Atsuko Taniguchi, Yumi Mizoguchi, Mao Miyata, Yuko Owaki, Kazumi Furukawa

**【Key words】** basic nursing education, emergency care, emergency medical care,  
simulated demonstration

---

Kumi Terashima, Miyuki Yamaoka, Yumi Mizoguchi, Mao Miyata, Yuko Owaki,  
Kazumi Furukawa : Miyazaki Prefectural Nursing University  
Hitomi Kurogi : Miyazaki Prefectural Nobeoka Hospital  
Rieko Inoue : Ex-Miyazaki Prefectural Nursing University  
Fumie Numaguchi : Miyazaki Prefectural Nichinan Hospital  
Atsuko Taniguchi : Miyazaki Prefectural Center for Handicapped Children